

【緒言】

一橋大学附属図書館の将来像を見据える ―研究開発室の意義再考―

一橋大学附属図書館長・研究開発室長

大月 康弘

一橋大学附属図書館に研究開発室が設けられたのは、2012年4月のことだった。当時の附属図書館長、研究開発室長、江夏由樹先生（現名誉教授）は、『年報』第1号「創刊の辞」で当室の任務を「図書館機能の強化を目指す様々な調査研究を進めることであり、そこには、図書館の中長期戦略を策定するという重要な役割が含まれている」と記された。

大学図書館を取り巻く環境は、今日急速に変化している。学術情報の電子化は加速度的に進展し、電子ジャーナル・データベースの設置は必須となった。また、かかるメディアでの成果発信のニーズも激増した。他方、大きな国際マーケットを持たないものの人類の文化遺産となる学術研究分野も多くあり、浩瀚な書物体での刊行が世界各所でいまなお盛んである。それらの集書も、また大学図書館の必要業務であり続けている。

大学図書館をめぐる近年の環境の変貌を検証し、今後に備えていくことは、大学という組織における研究・教育活動の行く末を左右する重要課題といえる。当室活動のますますの充実を図らねばならない所以である。

他方で、国立大学法人を取り巻く財政的環境は厳しさを増している。当室も当初、附属図書館及び社会科学古典資料センター所属の専門助手4名を室員とし、図書館の事務を担当する学術・図書部から学術情報課長が参加する組織体制としてスタートしたが、経費削減の折から、現在この体制は維持しえていない。現在専門助手の配置はなく、学部所属の教員（石居人也教授、加藤圭木准教授）にアソシエイトとして兼担をお願いしている現状である。

厳しい現状とは申せ、当室の活動は、学術・図書部職員各位の積極的、かつ旺盛な活動によってその内実を誇りえている。昨春より室長となった私にとって、本冊に収められた館員諸氏による成果発信は、誠に貴重な図書館活動の果実に映る。読者諸賢も、今号の記事によって、当館の活動について理解を深めていただけたらと思う。

改めて申すまでもなく、一橋大学附属図書館の特長の一つは、名実ともに大学の「中央図書館」たる点にある。在学生・卒業生の拠り所こそ、この附属図書館にほかならない。他の大規

模大学にあっては、各研究科・研究所がそれぞれに図書館・図書室を備えている。中央図書館は、学内の各図書館・図書室の間の連絡調整、また、学部学生のための学習図書館としての機能を主たる任務としているケースが多い。これに対し、本学の附属図書館は、全一橋人の学術情報の文字通りのセンターとして、研究活動、また情報発信の主翼を担っている。

学術情報基盤の電子化に伴い、図書館の形態・機能は大きく変わりつつあるが、研究大学の支柱を担う当館の役割は、今後ますます重要となってくるだろう。2019年度よりは、一橋ジャーナルHitotsubashi Journalの発信拠点の役割を担うことが予定されている。電子媒体での発信を含め、今後の図書館機能の充実が図られねばならない。

こうした状況のなかで、現在、図書館は次の4つの課題に向かい合っている。

第一に、すでに江夏元館長が宣言されていたように「第一線で活躍する研究者の必要とする図書・雑誌・データベース等の資料を効率よく、迅速に蒐集・整理・公開する体制」をますます充実させることである。これは、研究図書館としての機能を一層向上させる上で必須の課題である。そのためには、研究現場との橋渡しとなる「リエゾン・ライブラリアン」制度の導入などが喫緊の課題となつてこよう。

第二に、図書館が大学における研究成果の発信基地となることである。これは、上述の通り近々予定されている事項であるが、すでに設置されている本学の機関リポジトリのさらなる整備を含んで、なお真摯に推進すべき課題と考えている。

第三に、文書館的機能の強化である。これまで当館は、書籍形態の学術情報の収集に努めるほかに、非図書資料も受け入れてきた。特に、本学の歴史に関わる貴重にして重要な資料を中心に受け入れてきたが、今後これらを整理・公開する作業は、ますます重要になってくるだろう。図書館が事務を取扱っている「学園史資料室」の事業を、直接に取り込む必要がある。それは、近代日本の経済・社会を創り、幾多の有為な人材を育成してきた本学の歩みを改めて検証し、本学の存在意義を歴史のなかに位置付ける作業を含んでいる。6年後に控える本学の創立150周年（2025年）に向けて、その作業を粛々と推進していきたいと思う。

第四に、学習図書館機能の拡充である。本学の附属図書館は「研究図書館」としての性格が強く、「学習図書館」としての機能は必ずしも十分ではなかった。学生への学習支援の一環として、ラーニング・コモンズ等のさらなる充実が必要であろうか。

限られた大学予算のなかで以上の課題を進めることの困難さは、年を重ねるごとに増している。今後は、図書館独自の努力によって、人員・予算・スペースの制約を解消していく必要が

あるかもしれない。学術情報の蓄積・整理・分析・発信のあり方に関する検討を中心にしながらも、図書館のあり方そのものをも検討する場として、研究開発室への期待はいや増すことだろう。当室に期待いただくとともに、今後、読者諸賢には、物心両面でのご支援をお願い申し上げる次第である。